

「第121回津浪祭」開催

11月5日、恒例の津浪祭が開催されました。明治36年(1903)に始まってから第121回目です。

当日は朝9時半頃から、JRが八幡踏切付近で電車を緊急停止させ、乗車していた人々が線路上へ降り、高台の広八幡宮を目指して避難する訓練をしました。

この時、JRの職員さんが赤い旗を振りながら「津波が来るぞ。走れ。歩くな。」と、緊迫した叫び声に、避難者たちもその行動は真剣そのもので、避難訓練の成果は上々であったと思います。今年



は、電車から降りる時も、はしごを使わずに、電車の床に座り、滑るようにして線路へ降りるのを見ると、実際の時を想定した訓練だったので、よけいに緊迫していたのでしょうか。

11時から、「津浪祭」式典でしたが、それを前にして、広小学校6年生と耐久中学校3年生が「広村堤防」の上に一握りの土を盛りました。これも、安政津波の後、次の津波から広村を守るために濱口梧陵翁が濱口東江翁等の賛同を得て、築造したことに感謝し、自分達で守りながら防災の心を持ち続けようとするものです。いつものこと



ながら、この光景はテレビや新聞のカメラが何台も構えていました。

津浪祭も、

2015年に「世界津波の日」が制定されて以来、多くの皆様、マスコミの注目を集めています。これが津波防災により一層の効果があると期待しています。今年も、毎日放送ラジオ、和歌山放送ラジオ、インターネットラジオといろいろなラジオで放送していただきました。

濱口梧陵国際作文コンテスト優秀賞

今年度はじめて実施された「2023年濱口梧陵国際作文コンテスト」は12カ国(チリ、インド、インドネシア、日本、韓国、ラオス、マレーシア、ペルー、シンガポール、スリランカ、トルコ、米国)から44点の応募があり審査の結果、優秀賞に和歌山県立日高高等学校2年生、寺井巴菜さん、入選に同じ日高高等学校3年生、宮井沙也奈さんとマレーシアのNur Aminah Muhammad Mahadiさんが選ばれました。

寺井さんの作文のみ掲載します。英文で応募されたので、事務局が作成した仮訳です。細かなニュアンスなどは、原文を確認してください。

英語の原文は「稲むらの火の館」にあるほか、ホームページでも紹介しています。



作品紹介ページ

命を救う行動(仮訳)

和歌山県立日高高等学校

2年生 寺井 巴菜

和歌山県は自然との関わりが深いです。美しい山と海を楽しめます。しかし、近い将来、和歌山では南海トラフ地震による津波の発生が予想されています。その可能性は本当に恐ろしく、私は地震や津波による被害は予想以上に甚大になると懸念します。残念ながら被害を完全に防ぐことはできません。だからこそ、被害を最小限に抑える努力が必要なのです。では、津波の被害を最小限に抑えるために今私たちは何ができるのでしょうか？

まず、災害を防ぐ方法として、災害に備えることで常に意識を高めておくことがあげられます。この取り組みは、私たちが保育園児の頃から行われています。例えば、災害に備えるための授業があります。訓練中、生徒たちはサイレンを聞くとすぐに机の下に入ります。その後、校庭などの場所に出なければなりません。中学校や高校の授業では、高台へ行くためのルートを歩いて確認します。この活動は年に数回行われており、学生たちは毎回真剣に取り組んでいます。しかし、実際の災害が起こった時に、この授業で行ったことを全ての人が実践するのはとても難しいことだと思います。災害時に勇敢に行動した人物の一人が濱

口梧陵です。私が濱口梧陵のことを初めて知ったのは小学生の時でした。地震と津波について詳しく知るために「稲むらの火の館」に行ったからです。当時、私はこれまで経験したことのない大きな地震を経験したばかりで、小学校の授業でも自然災害について学んでいました。濱口梧陵は、大地震の後に津波が来ることを知っていました。当時、大地震が起きた時、津波が来るだろうと梧陵は予想しました。村の人々に危険を知らせるために、彼は稲むらに火をつけました。そして彼は「逃げろ!!」と叫びました。梧陵と火のおかげで、多くの村人の命が救われました。津波に対して即座に立ち向かった彼は勇敢で偉大でした。そうした精神は現代人にこそ必要なものです。今は誰もがスマホを持ち、いつでも地震速報を知ることができる時代です。それはとても便利です。一方で、私たちはメディアからの情報に頼りすぎているかもしれません。特に若者はスマホ依存のため、自分だけで行動することがほとんどありません。防災に対する意識を持つことが大切です。意識を高めるために、最近、私の街で防災関連のイベントが開催されました。教室ではなく、祭りとともに楽しみながら防災について学ぶことができます。また、私たちの街には津波避難タワーがあり、高いところに行けない場合でも、タワーに登ることができます。タワーに登ることで、必要な行動をより迅速に行うことができるようになります。そのため、市民の防災意識の向上につながるこのようなイベントを、定期的に行うことが望まれます。

さらに、同じ地域に住む住民同士のつながりも本当に必要だと実感しています。それは、人は協力しなければ何事も成し遂げることができないからです。災害を経験した人は、人の優しさ、温かさに助けられた、と必ず言います。しかし、地域の絆は徐々に薄れつつあるのが現状です。何か重大なことが起こった場合にお互いに助け合える関係を、地域社会で構築することは非常に重要です。災害への心構えを学ぶことで、まず自分の身を守ることができ、それが周囲の地域の人々の命を守ることに繋がります。また、自分の安全だけが重要だという考えも間違っています。自分の命はもちろん大切ですが、他人の命も大切です。濱口梧陵がしたように、私たちも他人のことを考えるべきです。私は高校生として、濱口梧陵のように自ら進んで行動できる人になることを強く目指しています。

百世安堵

関西大学社会安全学部 近藤誠司

第33回 PDCA&S

様々な防災事業に参加していると、「現場ではPDCAサイクルを遂行することが重要だ」という“決まりフレーズ”をよく耳にする。PLAN（計画を立て）→DO（実行し）→CHECK（課題を検証して）→ACTION（改善を為す）ということをおよそ言いたいようだ。それはまあ、確かに大切なことではある。

しかし、防災事業をマネジメントする上で真に重要なのは、そうした表面的な項目に「だけ」集約されるものではない。ようやくときおり散見するようになってきた「PDCA&S」の「&S」（アンド・エス）が、死活的に重要なのだ。この場合の「S」とは、SHARE（シェア）、すなわち、「共有すること」である。

ところで、「&S」が、付け足しなどではなくて“本丸”であることを理解するために、今回は2つの視座から説明を加えておきたい。

1つ目は、防災事業自体のシェアの重要性である。マジョリティが安全地帯から批判を言い募り、自分自身は無関係を装って冷笑するばかりのSNS時代にあって、防災の領域は窒息しかけている。圧倒的に「プレイヤーの多様性」に欠けていることが問題なのだ。そうしたなかで、“仲間内”でPDCAサイクルを“まわす”ようになればなるほど、内部と外部の間に“見えない壁”を作ることになる。この陥穽に気付いていない実践家が（ときに理論家も）あちこちに存在している。

そのために2つ目として、情報をシェアすることが極めて重要となる。いま何をしているのか、何のためにしているのか、どう変えようとしているのか、短期と長期の展望や如何に…。そのすべてをオープンにしていかなければ、外部から参画する道は閉ざされてしまう。「分担」よりも「連携」すること、さらに「連携」だけでなく「連帯」のありかたを探っていかなければならない。